

 J.A.D.E	<h1>ふくりゅう</h1>	特定非営利活動法人 日本下水文化研究会会報
		発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)
		平成 31 年 4 月 12 日 通巻 95 号

## ふくりゅう 95号 目次

「水循環基本法を“動かす”シンポジウム」開催のお知らせ	1
2019 年度日本下水文化研究会総会開催のお知らせ	2
定例研究会報告「ゼロトイレと水問題」	酒井 彰 2
バングラデシュ便り No.43 暦	高橋 邦夫 3
海外技術協力分科会から	4
「上下水道の人物 50 傑」が出版されました	5
運営委員会から／編集後記	5

「水循環基本法」を“動かす”国民運動協議会主催

## 水循環基本法を“動かす”シンポジウム開催のお知らせ

日本下水文化研究会では、「水循環基本法」を動かす国民協議会に参加しています。同協議会への参加は、3月20日現在30団体です。同協議会が主催する「水循環基本法を“動かす”シンポジウム」(後援:協議会参加30団体、企画:国民運動協議会実行委員会)が下記日程で行われることになりましたのでお知らせいたします。なお、企画内容・プログラムについては、今後変更されることもあるかと思いますが、本会ホームページにて適宜お知らせしてまいります。

記

日時:2019年5月23日(木) 10:00~17:00

会場:憲政記念会館講堂

(千代田区永田町1-1-1、国会議事堂隣接)

参加費:無料、ただし当日の講演内容、参加団体の意見発表を納めた講演集(1,000円)を購入していただきます。

シンポジウムのプログラムは以下の通りです。

<午前の部>10:00~12:00

- 主催者挨拶、来賓挨拶、参加国会議員の登壇と挨拶
- 経過報告:事務局長 稲場紀久雄
- 基調講演 高橋 裕先生/森山浩行衆議院議員
- 環境劇場:朗読劇「春の小川を取り戻せ!」(実行委員会企画・出演)

<午後の部>13:00~17:00

- 各論講演 13:00~14:00  
河川:宮本博司/水環境:藤井絢子/地下水:三好則正/上下水道:酒井彰/  
特論・リニア:樫田秀樹
- 水制度改革を求める全国の声 14:10~16:40
  - 参加団体から各地の実情と水制度改革を訴える声を伝えていただきます。
- 決議文朗読及び代表国会議員に請願依頼 16:40~16:50
  - 決議文及び国会請願文の朗読と決定
  - 代表国会議員(紹介議員)に請願依頼
- 閉会挨拶

## 2019 年度日本下水文化研究会総会開催のお知らせ

日本下水文化研究会では 2019 年度（第 23 回）総会を 6 月 22 日（土）に開催いたします。会場は、一昨年と同様、全水道会館です。

2018 年度は、「文化研存続問題及び記念誌編集委員会」の要請により、会員の皆様に、本会の存廃に関するお考えをうかがいました。結果はふくりゅう 94 号に掲載した通りですが、同委員会では存続を望む声が多く、運営委員の高齢化は文化研の解散理由には当たらないと判断し、適切な組織改革をすることで存続する方向で、具体の答申内容が検討されています。2019 年度は役員改選の年度となっておりますので、存続問題委員会の答申を踏まえた組織ならびに役員が提案されることとなります。

総会は、例年のように分科会・委員会からの報告と議案の審議を行う総会の 2 部構成で考えています。審議いただく議案は以下の通りです。6 月初めまでには、議

案書をお届けします。ふるって参加いただきますようお願いいたします。

記

日時 2019 年 6 月 22 日（土） 13:30～15:00  
（13 時より受付）

会場 全水道会館（文京区本郷 1-4-1）

第 1 部 2018 年度分科会・委員会活動報告

第 2 部 総会

第 1 号議案 2018 年度事業報告の承認ならびに会員の現況報告に関する件

第 2 号議案 2018 年度収入支出状況報告及び会計監査の承認に関する件

第 3 号議案 財産目録の承認に関する件

第 4 号議案 役員の改選に関する件

第 5 号議案 2019 年度事業計画及び予算に関する件

### 第 69 回定例研究会報告

## 「Zero トイレと水問題」

本会代表 酒井 彰

平成 31 年 3 月 23 日、新宿 NPO 協働推進センターにおいて、雨水市民の会から事務局長の高橋朝子さんと人見達雄さんをお迎えして、平成最後の定例研究会を開催しました。Zero トイレとは、多くの人が排泄する尿尿を混ぜずに、しかも便と尿を「自分で別々に回収する」ことを基本とするトイレのことです。そして、トイレ設備も水洗用水も必要とせず、費用もほとんどかかりません。このテーマを選んだのは、2005 年の雨水利用国際会議に参加させてもらった縁で、自費出版された「～山と災害～Zero トイレの提唱」という本をいただき、バングラデシュで尿尿分離のトイレを普及してきた者として、相通ずるところがあるというのはもちろんですが、我々の排泄と流した後のことを今一度ともに考えてみる意味があると思ったからです。

本のタイトルの通り、Zero トイレは災害時と山へ行った時に役立ちます。でも人見さんは、日常生活でもずっと Zero トイレを使い続けておられます。当日は、高橋さんの講演に入る前に、人見さんからゼロトイレとはどういうものか、その基本的な作り方、座らずにスクワットの姿勢では排泄が難しい人もいるので、いろいろなアイデアが紹介されました。

高橋さんたちは、ソーラーシステム研究グループ（その後「雨水市民の会」へ）のメンバーとして、1982 年

に NHK ブックスから出版された「都市の水循環」を出版されましたが、当時の水問題を振り返りながら、現在の問題点を見据え、また、巨大災害で感じたことから、Zero トイレに至る経緯を語っていただきました。そして今、“キレイキレイ生活”が蔓延している我が国の現状から、関連する問題を探っていくと、マイクロプラスチックの汚染、水資源、栄養塩循環、防災時の衛生、さらには世界の水資源と衛生などが見えてくると言われました。我々日本人は、これまでも便利さ、快適さを求めた結果、さまざまな問題に直面させられてきたこと



使いやすい Zero トイレのアイデアを披露する人見さん

から、学んでいないなど改めて思いました。

講演後の質疑の際、先日バングラデシュで、水洗トイレで便を流すのにどれだけの水が必要かを実験（牛糞を使って）した際、手桶で流すよりずっと大量の水が必要なことを動画で紹介しました。高橋さんも指摘されましたが、世界中で都市への人口集中が進むことが予想されている近い将来、水洗トイレ以外の選択肢をもたなかったら、どうなってしまうのかと思わざるを得

ませんでした。

講演で紹介されたヴァン・デア・リンの著作「トイレットからの発想」（1980）のなかの「いったいどうしたら私たちが自分の尿尿に責任をもてるのか」という言葉が印象に残りました。

水問題に真剣に長く取り組んでこられた雨水市民の会の方々と自由討論、そして懇親の場は参加者数は少なかったものの、有意義な定例研究会でした。

## バングラデシュ便り No.43

## 暦

### 本会運営委員 高橋 邦夫

古来より人間の生息する様々な場には暦が存在したであろう。また暦の表記は民族固有の文化として編み出され刷新されていく一方、移動、交流、侵攻、略奪、征服など民族間のコンフリクトが繰り返される中で、世界の文明を表象する統一されたものとして定着してきた経過がある。特に、計測に基づく合理的な解釈は科学の進展と表裏一体をなし、大きな推進力となってきたことは事実である。いわば暦は、宇宙の枠組みとしての星座、地球の太陽を周回する公転と、月の地球に対する公転にかかわるそれこそ様々な事象・生業にかかわる一つのロゴスといってよいだろう。このように暦の刷新・改革・統一への歩みは、文化の合理的な統合としての文明化というべきものであろうが、一方で文化の脈流は、固有の豊かで深層的な感受性ともいうべきものを含んでいる事実がある。それは人間のみならず様々な生物の生態と相互作用を持つ事実や、体内時計、体内暦などに刻まれた感性など限りなくロマン的な側面も持ちあわせている。

歴史的に 4 大文明といわれるメソポタミア、エジプト、インド、中国では紀元前数千年の古来から固有の暦を持ちあわせていた。それらは農耕と祭祀に密接に関わるものであったであろう。そして共通の拠り所は、星、太陽、月であった。民族移動、侵攻、略奪、征服を繰り返す中で、特に、アリアの移住（BC20-15 世紀）、ペルシャの勃興（BC6 世紀）、アレクサンダーの遠征（BC4 世紀）、ローマの興隆（BC3 世紀）などが暦の文明化に寄与したことは十分にうなづけることである。古代ローマ（紀元前 8 世紀以前）では暦は年間 10 か月しか無かったらしい。理由は冬場の 2 か月は農耕に適さないため省いてしまったという乱暴で可笑しげなものもあった。その間、人々は冬眠していたのだろうか。

ベンガル暦は太陽暦であり、365 日/年、閏年は 4 年に 1 回、2 月 31 日となる。我々が通常用いている世界

標準とされるグレゴリオ暦（西暦；1582 年制定）と同様と思われがちであるが、新年度初日から 5 か月目までは 31 日/月、残りの 7 か月は 30 日/月である。ベンガル暦は西暦 1584 年、ムガル帝国皇帝アクバルによって公布されたとされる。この時期、ムガル帝国は絶頂期にあった。また季節は 6 季に分かれ、12 か月のベンガル表記（古来ヒンドゥー暦の星座に由来する）は後に示すが、民族間の交流、文明化への足跡に無縁ではないことを示している。また 1 週はローマ暦に準じた 7 日からなる。

新年度初日の 4 月 14 日は、Poila Boishakh (Pahela Baishakh という表記もある) と呼ばれる国の祝日であり、全国で盛大な祭りがおこなわれる。残念ながら私は体験していないが、この日はこの国では最も暑い時期に該当する。伝統的な民族衣装をきらびやかに着飾った老若男女は強烈な日差しさけて木陰に集い、夜明けとともに湧き上がる、タゴールの国民的抒情歌謡"Esho he Boishakh"の斉唱をもって祭りが始まる。詩の意味するところは、“これまでの様々な悩み、しがらみを一切忘れ去り、改めて新たな希望に向き会おう”、といったようである。大晦日の除夜の鐘の因縁と相似しているのは何処も同じであろう。

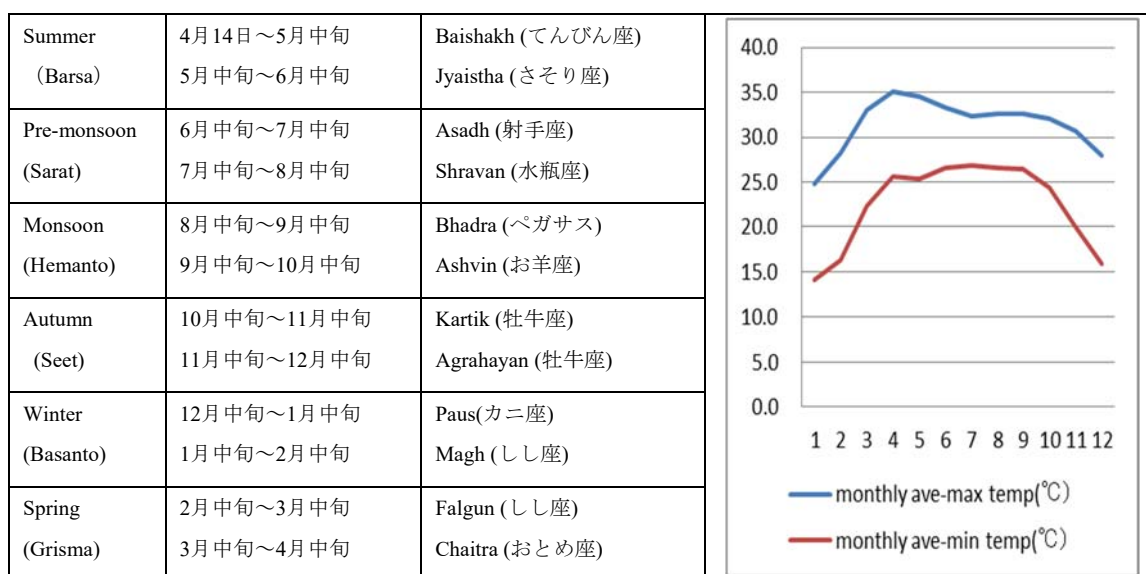
この日、往時の領主（ザミンダール）が小作人に様々な甘味を振る舞い、商人は顧客の過年度帳簿、いわば大福帳を回収保管し、甘味をふるまうとともに新たな大福帳を顧客に配布し契約を更新する、といった祭りの伝統は、現在では数々の企業主、商店主、篤志家が伝統的な食事、甘味、飲料、衣料細工物などを提供するという形態に変容したようである。また、併せて、多くのイベントが企画され、ダッカでは特に、ダッカ大学民族工芸科の学生たちの民族衣装や踊りなど趣向を凝らしたパレードをメインに、多くの市民団体の歌、踊り、合奏が繰り広げられ、全国津々浦々、レスリング、ポートル

ース、牡牛のレース、ハトのレースやしゃもの蹴りあいなど千を超えるイベントで終日の喧騒を演出するらしい。勿論それらは、宗教、民族、党派、階級を問わない多重な文化の織り成すイベントの一つと言ってよい。バングラデシュ・インド国境間では、ベンガル語を共有する両国市民同士が国境のフェンスを介して親睦する。それは 1947 年以降、現在に至るまで継続されているのである。

4 月 14 日は新年元旦である。この日を新年の起日とする慣行は何に由来するのであろうか。ムガル皇帝アクバルが太陽暦を導入した大きな理由の一つに、モスリム暦が米作農業経営と現実的に乖離しているという事実があるであろう。ザミンダールの支配下で農業

従事者たる小作人は収穫期にのみ納税できるわけである。現在、この国での農耕期は、第 1 農耕期 (4~8 月：主としてアウス作付け期)、第 2 農耕期 (8~12 月：主としてアマン作付け期)、第 3 農耕期 (12~4 月：ボロ作付け期) に区分され、第 1 期と第 2 期が天からの雨水に依存した伝統的な農業の形態である。はたしてそれだけかなのか。

日本では、明治 5 年 11 月 9 日 (旧暦)、太陽暦勅書が発布され、それは 12 月 3 日 (旧暦) を明治 6 年 1 月 1 日 (西洋グレゴリオ暦) とするものであった。これには、旧暦明治 5 年 12 月の給与はカット、さらに明治 6 年は旧暦では 13 か月の閏年であり、合計 2 か月分の合目的な給与削減が意図されていたのである。



### 海外技術協力分科会から 地球環境基金からプロジェクト採択の内定

本会海外技術協力分科会が、バングラデシュ・クルナ市の都市スラムの衛生改善に着手したのは 2012 年度からでした。3 年間のプロジェクトで得た教訓は、設備としての共同トイレを整備しても人々の衛生行動が変化しない限り、下痢症リスクは軽減しないということでした。この後もスラム住民への啓発活動や京都大学大学院生をインターンとして迎え、リスク評価のための調査に協力するなどの活動を行いながら JICA 草の根技術協力事業等への申請を続けてきました。しかし、残念ながら採択されないまま、今日に至っていました。この間、バングラデシュでは、日本人が犠牲になるテロが発生するなど治安が悪化し、昨年の申請に対しては、採択の水準にはあるが、スラムというフィールドの安全には懸念が残るということで、採択には至らず、今回は最後の機会との思いで申請した結果、標記の通り採択が内定しました。

なお、前号でお知らせした、TOTO 水環境基金へ

の申請は採択されませんでした。

活動のタイトルは、「バングラデシュ都市スラムにおける衛生行動の変容促進と衛生環境の形成」ということで、衛生行動の変容を促すために、啓発活動とともに、手洗い場などの設備を整えるという介入をすること、また、コミュニティ組織を形成し、自主的に共同トイレ、手洗い設備、尿尿の処理装置であるセプティックタンクを管理し、衛生行動を持続されるようになることを目的としています。

このプロジェクトの実施にあたっては、これも前号でお知らせしたように、JADE Bangladesh のメンバーとして活動を経て、UNDP (国連開発計画) に転職した Qazi Azad-uz-zaman 氏や関連する機関とも協力しながら進めていきたいと考えており、すでに了解を得ています。協働の機会ができたことで、プロジェクト成果を現地社会に広く伝搬できるようになるのではと期待がふくらみます。(文責：酒井彰)

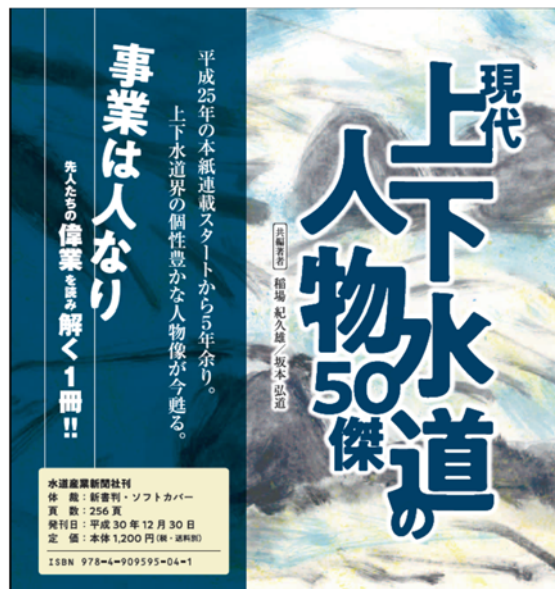
## 『現代上下水道の 50 傑』が出版されました

すでに、ホームページではお知らせしておりますが、水道産業新聞に連載されてきた「現代上下水道の 50 傑」が、昨年末、水道産業新聞社から図書として刊行されました。この企画は、本会評議員稲場紀久雄大阪経済大学名誉教授の発案により、同氏と元厚生省水道環境部長坂本弘道氏が編集にあたり、本会関係者も多数執筆に携わりました。

掲載されている 54 名は以下の通りです。皆さんがお世話になった方もきっと含まれていると思いますので、ぜひ手に取っていただきたいと思います。

岩井 四郎、熊谷 太三郎、杉戸 清、寺嶋 重雄、久保 尠、長谷川 清十郎、小林 重一、荻田 保、新居 善太郎、根本 龍太郎、矢野 信吉、田村 元、武島 繁雄、毛利 素好、長谷川 清、間片 博之、野中 八郎、海淵 養之助、合田 健、鈴木 平三郎、大井上 宏、岡崎 平夫、左合 正雄、岩井 重久、南部 ●(牛へんに羊)一、清水 清三、廣瀬 孝六郎、田邊 弘、楠本 正康、石橋 多聞、西片 武治、高島 作雄、内藤 幸穂、國川 建二、田邊 一政、小島 貞男、山下 眞一、西尾 武喜、宮岡 正、國富 忠寛、井深 功、井前 勝人、遠山 啓、亀田

素、岡本 成之、板倉 誠、西堀 清六、関盛 吉雄、堤 武、小林 康彦、船木 喜久郎、榊原 定吉、桶田 義之、前澤 慶治(掲載順、敬称略)



## 運営委員会から

- 昨年度、本会の存廃に関する会員各位の意見をうかがうためにアンケート調査を行いました。これを受けて、文化研存続問題及び記念誌編集委員会」からの答申の基本としては、「高齢化は活動を続けられない理由にならない」というものであると聞いています。海外技術協力分科会のプロジェクト申請も採択が内定しており、こちらは、高齢者だけが携わるわけではありませんが、活動を継続してまいる所存です。
- 運営委員会では、アンケートでいただいたご意見を受け、インターネットを通じて、これまでの成果を外部からアクセスできるようにしていきたいと思ひます。海外技術協力分科会ではその試行をしておりますし、外部からのアクセスの多い尿尿・下水分科会でも問い合わせ等をメールで受け付けるようになってはいますが、これをもっと分かりやすくするとともに、開示する内容も充実していけたらと思ひます。
- NPO 法人 20 周年記念誌については、今年秋には発行できるように準備をしております。会員各位からお寄せいただいた「下水文化への思い」も掲載いたします。こちらの方は、いったん締め切りしましたが、引続きご希望があれば受け付けます。

## 編集後記

バングラデシュの都市スラムを対象にしたプロジェクト申請がようやく採択内定となりました。プロジェクトを申請してきて思ふのは、まだ、日本では、施設の供与が中心で、現地関係者がプロジェクトに携わり、経験から学び、主体的な活動の担い手として成長していくことを目指すような活動を支援していくということが少なくないということでした ▶多くの社会開発プロジェクトにおいて、プロジェクトのターゲットとなる人々の意識や行動の変化がみられなければ、その人々が

裨益を受けることになりません。数年前から行っている都市スラムでの活動ではそのことを教訓として実感してきましたし、行動変容を促すような活動には、現地の人材が欠かせません ▶プロジェクトが採択されない間、研究を兼ねて啓発活動や意識調査にとどまっていた。プロジェクトが実施できるのは私にとって最後の機会になるかもしれませんが、次に引き継ぐ、広く伝えることを念頭に取組んでいきたいと考えています。

(酒井 彰)

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会

〒162-0823 新宿区神楽河岸1-1

東京都ボランティア・市民活動センターメールボックス No.78

e-mail: [jade@jca.apc.org](mailto:jade@jca.apc.org)

URL: <http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>

URL(ブログ): <http://blog.goo.ne.jp/jadetokyo>